ヒロシマ ナガサキ 通信117

1993
11.20
●発行 長崎の証言の会 ●事務局 〒852 長崎市宝栄町18-4 ☎ 0958 (62) 8725

松谷訴訟控訴審第1回口頭弁論の日、福岡高裁に入る松谷さん(左端)**と支援する会の人びと。**10月14日、横山照子さん撮影。

"にんげん"をとりもどそう

「認定申請却下処分取消し」という画期的な一審判決への控訴審が始まった。10月14日、福岡高裁での第一回口頭弁論に、長崎・福岡・広島ほか各県から傍聴席の二倍にのぼる一五〇人が集った。同時刻、博多の繁華街では千枚のチラシを配り市民に支援を呼びかけた。

「不当な控訴を取り下げよ。これ以上苦しみを長引かすな。」法廷では松谷さんが毅然と訴えた。

10月19日、日本被団協は全国代表者会議を皮切りに中央大行動を展開、「被爆50周年＝核兵器ゼロ援護法実現をめざす国民運動」をスタートさせた。

あの日からやがて半世紀。被爆者・国民はもう待てない。ふみにじられた"にんげん"をとりもどそう。「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ること」を拒否しよう。日本列島を浸蝕する底知れぬ汚濁の根源を見きわめ、いまこそ告発の声をあげよう！ 核も戦争もない美しい明日を迎えるために。（広島・長崎通信編集部）

11月7日　長崎新聞
被爆50年の記念し出版へ
長崎原爆被災協　被害や運動など網羅

10月10日　長崎新聞
体験と思想テーマに
長崎　反原爆の立場で公園
石田一橋大名誉教授

■長崎の証言の会総会
11月28日(日)午後2時～4時
長崎県教育文化会館(長崎市筑後町)

■原爆犠牲者追悼・日中不再戦の集い
12月8日(水)午後6時半～8時半
長崎市平和会館(長崎市平野町)
〔主催〕中国人原爆犠牲者を招く会
〔協賛〕長崎平和推進協会

「学徒出陣」50周年目の幻影

鎌田定夫

近衛内閣から東条内閣へ

一九四〇(昭和15)年七月、第二次近衛内閣が発足、「大東亜新秩序建設」と「国防国家確立」をめざす基本国策要綱を決定した。

当時、私は小学五年だったが、チョビひげにハイカラの貴公子、近衛秀麿首相が東条陸相らを従えて颯爽として現われたときの報道写真を、鮮明に記憶している。

九月、日独伊三国同盟調印。十月には近衛首相を総裁とし各県知事を地方支部長とする「大政翼賛会」が発足。十一月十日、「紀元二千六百年記念式典」が全国で挙行され、宮崎では「八紘一宇」の塔が完成、私たちも見学した。長崎の三菱造船で戦艦武蔵が秘密裡に進水したのもこの頃である。

翌年四月より小学校は「国民学校」と改称され、七月には日本軍が南部仏印に進駐。十月に東条英機内閣が成立。やがて十二月八日、真珠湾攻撃の日がやってくる。

五年生では音楽や図画の課外活動に忙しかったのに、今度は一転して教育勅語や「青少年学徒ニ賜リタル勅語」の暗唱、毎月八日の必勝祈願神社参拝など、軍国少年へのきびしい修練が課せられた。

「学徒出陣」と「大東亜会議」

一九四二年一月、「国民勤労報国令」による学徒出動令が下り、中学二年に進級した私たちは川南の落下傘部隊に短期動員された。

ミッドウェー、ガダルカナルの海戦以降、日本軍の敗退が続き、翌四三年四月、山本司令長官の戦死、五月、アッツ島の全員玉砕。

六月には「学徒戦時動員体制確立要綱」にもとづく本格的学徒動員が始まり、私たちは富高海軍飛行場に二ヵ月、さらに都城の川崎航空機に終戦時まで動員され、その動員先では強制連行の朝鮮人労働者たちとも一緒になった。

九月二十二日、学徒の徴兵猶予停止(理科系と教育系のみ延期)が発令。十月二十一日、明治神宮外苑競技場で「出陣学徒壮行会」が行われ、十二月一日は学徒兵の一斉入営の日となった。

十一月五、六日、大東亜会議が東京の国会議事堂で開かれ、「共存共栄」の美名のもと、日本を盟主とする新秩序樹立が提唱された。だがこの頃、すでに日本ではアジアの各地から強制連行された捕虜や労働者が酷使されつつあった。

こうして被爆直前の広島・長崎の軍都・軍事要塞都市が構築されていき、一九四五年八月六日・九日の「あの日」と日本敗戦、無条件降伏の日がやってくる。

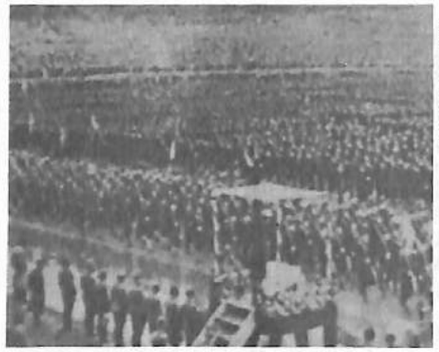
細川新政権への危惧と苦言

戦中戦後のこの五十年の年表に自分史を重ねながら、いま自分がいかなる情況の中にいるか、私はつよい危惧の念を抱かざるをえない。宇都宮徳馬氏は最近「細川新首相に近衛時代を思う」という論文で、「リベラリストや社会主義者もブレーンに持つ近衛さんの登場に、私は戦時体制の抑止役を期待していた」とのべつつ、「私は近衛さんの知性と、俗にまみれない新鮮さに期待したのだが、軍部権力に抗しえない弱さがあった」と回想し、その孫、細川新首相に次のような苦言を呈している。

「新政権は、冷戦後の世界秩序づくりに、米軍の肩代わりをいとわぬ軍事大国のはしくれとして参入するのか、それとも平和憲法を立脚点として、武器なき世界への一里塚を築く努力をするのか。後者の道は前者より厳しい。口先だけで憲法理念を守る、というだけでは不可能だ。武器輸出の外圧や、血を流す国際貢献という誘いが新政権を待っている。近衛首相が挫折した歴史を細川新首相は噛みしめてほしい。」(軍縮問題資料10月号)

たしかに「侵略戦争」発言など国民は新鮮な感じで聞いたが、これも「見直しの第一は、過去の侵略がもたらした未解決部分を誠実に処理すること」(小沢一郎)という新たな政治軍事大国としてアジアへ出ていくための「みそぎ」の手法ともいえよう。

最近、今国会での「政治改革」実現のためには「あえて泥をかぶる覚悟」と細川首相は語ったが、それは祖父近衛文麿のたどった道を想起させるに十分であろう。



学徒出陣(1943年10月21日、神宮外苑)

死者たちの嘆きと怒りを聞け

もちろん、五十年前と現在では歴史の条件は大きく変っている。何より日本国憲法の平和と民主主義の旗を掲げて、新型ファシズム＝新大政翼賛会への流れに抵抗する草の根の民衆が健在であり、真の変革と自由への道もまだ閉ざされてはいない。

平和は待つだけではやって来ない。たゆまない反戦平和の努力によってのみ、それは創られる。

一国の文化と未来を自ら摘みとろうとした学徒出陣、そしてアジアの永久奴隷化を企てた大東亜会議、その悪夢が五十年たって再び私たちをとらえようとしている。日本は再び「派兵時代」に突入し、すでに大学二部在学中の若者(自衛隊員)がやむなく学業を捨ててカンボジアへ派兵された。(わだつみ会「学徒出陣五十周年の声明」)

この十月下旬、私は「構造的暴力としての学徒出陣」と題して学生たちに語った。子どもから老人にいたる国民全体を侵略戦争にかりたて、「東洋鬼(トンヤンキー)」と憎悪され、あげくには全土を空襲で焼かれ、原爆で攻撃されたのはなぜか。

あの悪夢と幻影を追い払うために、私は学生たちに、あの死者たちの声に耳を澄ますよう訴えた。

日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』、被爆体験記集『証言―ヒロシマ・ナガサキの声』にこめられた死者と生残者たちの嘆きと怒りの声を聞いてほしいと。

知覧平和集会の唱和

長崎県北高来郡高来中学校

「特攻隊の皆さん、
やっとあなた方に会えました。
死ぬと分かっていてどうして飛行
機に「乗れるでしょう」。
たとえ、お国のためだとしても、
どうして「死ねるでしょうか」。
天皇のために死ぬことが一番美し
い生き方だと教えられ、
それを最後まで信じ込まされて、
本当のことを知らずに死んで行っ
た皆さん。
あなた方は、
愛する人への最後の手紙を、
どんな想いで綴られたのですか。
薄暗い「三角兵舎の中で」。
月明かりの「三角兵舎の屋根の上
で」。
そして、どんな想いで出撃前夜の
夜を過ごされたのですか。
出撃直前の写真に映るあなたの笑
顔は、
余りにも「悲しすぎます」。
だから、
「あなた方のおかげで平和です。」
と、
軽々しくは「言えません」。
人間らしく生きる生活を「飲み込
んでしまうほどの力が」、
あなた方を「死に追いやった力が」、
この地球上に潜んでいるからです。
しかし、あなた方の死を決して、
「無駄にはしません」。
真実を蔽い隠されないように、
死ぬことでしか生きられないこと
にならないように、
正しいことを正しいと堂々と言え
る私達と社会を
「築いていきます」。

――一九九三年五月十九日、
旧知覧基地で高来中学校
三年生一六三名が発表し
たシュプレヒコールより

私の〝学徒出陣〟

広瀬　方人

学徒動員

昭和十九年六月、中学三年生だった私は、三菱重工長崎造船所で働くことになった。二年先輩の五年生と同級生のほとんどが同じ工場に配属された。

工場には若い男性はほとんどいなかった。全て戦場に駆り出されていたのである。記録によると七百十万の男性が徴兵されていたという。工場の生産を支えていたのは、若干の熟練工のほかは、中学生と女学生そして女子挺身隊であった。機械は二十四時間フル回転し、私たちは一台の機械に三交替ではりついていた。昼夜を分かたず働いたのである。

昭和十九年の末になるとアメリカのB29という大型爆撃機が毎日飛んで来るようになった。警戒警報の間は働いているが、いよいよ飛行機が頭上に近づくと空襲警報が発令され、工場の電気がとまる。私たちはその度に仕事をやめて防空壕へ走ってかくれる。工場の生産はガタ落ちした。しかしそれでも、私たちは日本が敗けるとは決して思わなかった。

昭和一九年十月、十四歳（向って左）

一カ月一度の登校日

昭和二十年のはじめであった。私たちが一カ月に一度の登校日に学校に行くと、朝の全体集会の後、私のクラスだけ校庭に残された。私たちは校庭に正座を命じられた。私たちが坐ると、軍服を着て軍刀を腰に下げた配属将校（軍事教育の指導のために師団司令部から中学に派遣されていた軍人）が近づいて来て、重々しい声で言った。

「貴様らは何のために生まれてきたと思うか」

そして一人の生徒が指名された。

「はい、天皇陛下のために命を捧げるためであります」

「よろしい！」

それは彼にとって満足すべき答えであった。そしてその答えは、他の誰が指名されても同じであった。彼の話は続いた。

「しかるに貴様らは、その千載一遇の機会にもかかわらず、その機会を生かしていないではないか！貴様らは貴様らの親の子であって子どもではない。貴様らの親は貴様らを天皇陛下からお預りして、あとで陛下にお返しするために育てている。その時が今やって来たのである。三月三十日に甲種飛行予科練習生（略称予科練）の検査が本校で行われる。その日までに満十五歳に達するものは誰でも受験することができる。他のクラスからは多くの受験生がいるのに貴様らは何をしとるか」

彼の言葉は雄弁で説得力があった。彼の言葉を聞きながら「そうだ、その通りだ！」と私は感動して、お国のために命を捨てようと決意した。

両親の反対を押して入隊

帰宅して、夕食のとき両親に話した。母が「お前は長男だから」と反対したとき、そんな大人がいるから日本が負けるのだ！　と私は猛然と反撥した。両親はもうそれ以上何も言わなかった。

昭和二十年四月、私は沢山の人たちが振る日の丸の旗に見送られて長崎駅を発ち、福岡県糸島海軍航空隊に入隊した。入隊したその日から苛酷な訓練が待ち受けていた。しかし私には苛酷な訓練よりも、二年半後には特攻隊になって死ぬのだ、という現実的な死をつきつけられた恐怖の方が大きかった。その恐怖におびえて私は眠れなかった。そのような死におびえる自分が腹立たしく、そして卑怯者に見えて恥ずかしかった。入隊後の適性検査で、蛋白や血尿が出て帰宅を命じられた。福岡からの帰途、私は先生達の寄せ書きが書かれた日の丸を捨てた。私が教師になった時、あんなみじめな思いを生徒にはさせまいと誓った。

（証言の会事務局長）

平和への誓い

被爆者代表　吉田　孝子

四十八回目の原爆の日を迎えました。しかし、私は十八才で被爆した「あの日」のことを忘れることは出来ません。

一九四五年八月、県立長崎高女専攻科三年生の私は、三菱電機淵国民学校分工場に学徒動員され、モーターのコイル巻作業をしていました。

八月九日は朝から空襲警報が発令されました。当時、朝警報が出たら自宅待機するように指示されていたので、自宅で昼食の準備をしていたところに、突然、急降下する飛行機の爆音、目もくらむような閃光を浴び、田圃に焼夷弾が落ちたのかと思い、伏せの体勢をとったのと同時に家が崩れたのです。

私が隣の高谷さんに救出されたのは、八時間も後のことでした。私は立てない体になっていました。周囲の状況は、すっかり変わっていました。朝夕眺めていた浦上天主堂は消え、緑の樹々もなくなり、黒ずんだ幹が五、六本突っ立っていました。我が家は爆心地から七〇〇メートルほどの距離でした。南向きの縁側に腰掛けていた母は、頭、顔、背中と大火傷を負い、顔の皮はピラピラ下がり、ピンクの肉が剝き出しになっており、髪の毛は赤茶けてこびりつき、モンペもぼろぼろになっていました。この母は苦しみぬいて三日後に死にました。半身火傷の祖父も傷の手当を受けることもできないまま六日後に亡くなりました。父は軽い火傷でしたが、傷が化膿し、放射線の影響なのでしょうか、腸から出血して十二日後に亡くなりました。

屋内での被爆のために火傷は免れたものの、私はその後頭髪が抜け、重傷を負った脚はついに元に戻らず、また眼には原爆白内障の症状が出始めています。やがて半世紀になろうというのに、体内に巣くっている放射能の恐ろしさ、原爆のむごさにいまさらのように愕然とします。こんな恐ろしい兵器が、たとえ戦争であっても許されて良いはずはありません。核兵器をなくせという私達の願いに反して、核兵器は今なお保持され、更に新たな核兵器保有国の出現さえ取り沙汰されています。

「あの日」から四十八年、長崎の街はきれいになりましたが、あの地獄としかいいようがない中で、人間らしい弔いもなく茶毘に付された両親や祖父のことを思うと、今でも涙を押さえることができません。

私達が被爆者になったのは、みんな国が始めた戦争のせいなのです。それなのに、どうして国は原爆の被害を償おうとしないのでしょうか。国家補償の被爆者援護法をなぜ制定しようとしないのでしょうか。八〇〇万近い国民の署名、全国の七〇％を超える地方議会の決議、解散前の衆議院でも三分の二を超える議員の賛同があり、そして、参議院では二度も可決されたというのに、被爆者援護法は、前の国会でもついに日の目を見ることはできませんでした。再び被爆者をつくらない国の決意の証としての被爆者援護法を制定することは、そんなに不都合なことなのでしょうか。花の蕾の頃に被爆した私も、老人の仲間に入る年齢になりました。被爆四〇周年に三十六万人を超えていた被爆者も、今では三十三万人台となりました。

でも、私達は挫けません、核兵器のない世界と被爆者援護法の実現をめざし、核戦争の生き証人として、原爆の被害の事実を若い世代へ語り継ぎ、残された人生を精一杯生き抜くことを、原爆のために亡くなられた御霊の前でお約束して、私の「平和への誓い」とします。（平成五年八月九日、長崎市平和祈念式典にて）

（写真は吉田さんと長女和子さん）

『証言』第7集訂正
66頁下段　一九三〇年七月号→一九五五年、村山茂樹氏→村山滋樹氏
160頁写真　左・執筆者→右
（訂正しおわびいたします）

長崎市山里中学校と広島市翠町中学校の平和交流会

末永　浩

「ヒロシマ・ナガサキ中学生平和アピール」では、「世界全体が幸福にならなければ、私たちの幸せもないことを真剣に考えなくてはなりません。私たちは同じ地球に住む人間どうしだからです。

来たる二十一世紀は私たちの時代です。世界の平和を求めて、政府や国際機関の活動をただ見守るだけでなく、今一人一人がしっかりとした考えを持たなければなりません。そのために平和の原点であるヒロシマ・ナガサキに深く学び、正しく世界を理解し、人の痛みがわかる感性を身につけたいと思います……」と誓った。

山里中学がはじめて翠町中学へ

これまでいつも広島の翠町中から来てもらってばかりいるので、今年は山里中が翠町中を修学旅行で訪れ、平和交流会を持つことにした。こうして九月二九日、山里中二六七名は翠町中に到着した。

式次第は五月と変わらないが、内容はかなり違う。記念品の交換では山里中は平和壁新聞と千羽鶴、翠町中は山里中へ被爆した青桐の種から育てた苗と、写真パネルを贈った。

次に両校が平和学習の取り組み状況を互いに報告しあった。

「毎月九日は平和を考える日です。今年は朝鮮人被爆者の話を聞き、平和標語・平和ポスター、原爆遺跡めぐり、平和壁新聞づくりをしました。

今回は過去の戦争で、日本が原爆投下という被害を受けた国であると同時に、中国・朝鮮半島をはじめとするアジアの国々に被害を与えた国でもあるという視点に立って取り組んでいきました。

私たちが世界の中で、被害者であることのみを主張し、加害者であったことに眼をつぶれば、そこからはヒロシマ・ナガサキの普遍性は出てきません。ヒロシマ・ナガサキを語ることは、同時に南京を語ること、日本のアジア侵略を語ることでなければならないのです。私たちはそのことを知る必要があるのです。

未来を担う私たちが互いに心と心を通わせて、平和に向かって進んでいきましょう」と山里中は発表した。

山里中学構成詩「平和に向かって」

メインである構成詩の発表で、山里中は「平和に向かって」を発表した。これは三人の中学二年の女生徒が創作したものである。これを二年生全員で暗記して大きな声で発表した。

「昭和前期、約六十年前。小さい大帝国日本が、まるで狂ったかのように暴走を始めた。

一九二九年の世界大恐慌をはじめとし、満州事変、五・一五事件、国際連盟脱退、二・二六事件、日中戦争、そして太平洋戦争、アジア侵略へと発展した。

異国での日本兵士たちの記念写真、あふれる笑顔。だが、その背後にはアジアの人々の無残な死体、首が切られ、大地は赤く染められた。女や子供も人間として扱われなかった。日本兵はすべてのものを焼きつくし、殺しつくし、奪いつくした。

日本の植民地にされた朝鮮では、土地も名前も祖国への誇りも奪いつくされた。日本へ強制連行されて来た人たちは、人間扱いされなかった。（「アリラン」の歌）

日本はもう負けていたのに、国民でさえ、それを知らされず、沖縄は犠牲にされ、広島・長崎にはアメリカによって原子爆弾が投下された。広島・長崎は一瞬にして廃虚になり、父も母も子供も多くの市民が殺された。外国の人たちも共に犠牲になった。（「原爆を許すまじ」の歌）

それから平和と言える世の中になり半世紀。しかし今も悪夢は終わっていない。「戦争放棄」といいながら、それは口先だけ。「従軍慰安婦」の言葉は、まだ耳に新しい。過去の加害の事実を忘れたりかくしたりしているのなら、日本に明るい未来はない。

誰も変えようとしないなら、そのまま何も変わらない。犯した罪も償わず、いつ再び過ちをくり返すかしれない。こんな時代でも私達は生きていく。

地球と人類を滅亡させないために。世界の平和を確立するために。」

これは長い間の学習や練習の結果到達した表現と認識である。

翠町中学の構成詩

これに応えて、翠町中も構成詩を発表した。

「……みんな知っている？　中国で、朝鮮で、東南アジアで。

日本軍は戦争のためといって、多くの人々を無理やり働かせました。（「強制徴用」、その賃金をまだ支払っていないそうだ）

少女たちをだまして、兵隊の欲望の餌食にしました。（「従軍慰安婦」、その事実を政府はなかなか認めなかった）

罪のない人たちを、老人を赤ん坊を、お母さんを妊婦を銃剣で突き刺しました。（「住民虐殺」）

マレーシアのイロロ村では、昭和17年3月、「治安粛正」といって、一四七四人の住民が日本軍によって虐殺されました。たった一日で村は全滅し廃虚になったのです。傷を負いながら、死んだふりをして生きのびることができたショーさんは、その日本軍の部隊名を忘れませんでした。第五師団第十一連隊。それは広島にあった部隊でした。

アジアの人々は今も忘れない、日本軍の残虐行為を。父をかえせ、母をかえせ、青春をかえせ、平和を返せ、と言っているに違いない。広島は軍事都市だった。広島は虐殺に手をかした。（「軍都広島」）

歴史の事実は消すことができない。戦争の責任を私たちは負わなければならないのだ。（「戦争責任」）

ちょっと待ってください。日本は広島は長崎は、原爆を投下されました。その傷跡は今も深く残っています。私たちも父をなくし、母をなくしたのです。私たちは戦争の犠牲者なのです。

（戦争は過去のものだ。僕たちは戦後に生まれた。日本は戦争を放棄した。今の日本は生まれ変わったんだ。軍国主義と僕たちは無関係だ。）（しばらくの沈黙）

そう、私たちは戦後に生まれました。過去の侵略や略奪や虐殺、私たち自身に責任はありません。だけど、過去の事実を忘れていいわけじゃありません。過去に目をそむけることは無責任です。

戦争はいつも弱い者から犠牲にする。過去を忘れたら、未来も見えなくなる。戦争の無意味さを知るために、歴史に目を背けてはいけない。

目を開こう。耳を傾けよう。真実を知ろう。あやまちを繰り返さないために。」

両校の構成詩に平和交流会の取りくみの姿勢がはっきりと示されているのではないか。この平和交流会は成功だったと思う。

あとで山里中学の平和交流委員のアンケートを集約したところ、ほとんどが「大成功だ。すばらしかった」と答えている。

ある女生徒は「今日の交流会で私達はまた平和を語り続けることができた」といっています。

更なる前進をはかりたいと私も考えている。（長崎市山里中教諭）

会員・読者通信

「平和宣言」の実践こそ

東京都　西本　宗一

『長崎の証言』と写真、たしかに拝受いたしました。高校生にいまの時代を知ってもらいたいと話したものがとりあげていただき、おもはゆいです。でも、二度と再び繰り返してはならないと叫ぶ場を与えられて感謝しています。

『広島長崎の平和宣言』も拝受、毎年美しく高らかに宣言される平和宣言はあっても、その後何も起こらず、むなしい気持で聞いていましたが、本書を拝見していっそうその気持が強くなりました。実のともなう宣言、責任ある政治を願います。

若者たちに伝えひろげたい

京都市　河原　紀子

このたびは『証言』を送っていただきありがとうございました。いくつか読ませてもらいましたが富山女子高校のところで、私も初めて知った後輩たちの実践の内容がつづられており、すばらしい取り組みの一部を私も経験できたことを改めて幸せと感じました。と同時に、このような取り組みを『証言』という形あるものにされたことで多くの人に広げていけることは本当に大切なことだと痛感しました。私は周囲の多くの方々のおかげで貴重な体験ができ、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを学ぶことができましたが、多くの若者はそういった機会を与えられずにいます。だから私は、自分だけが幸せであることに満足するのではなく、多くの若者たちにもその幸せを分けていけるように、私の知ったこと、感じたことなどを伝えていこうと思います。（大学院生）

NACとともに

三田市　塩川　葉子

第五期生NAC（ネバーアゲインキャンペーン）大使選考については多くの新聞で紹介され、全国から70名あまりの応募がありました。全国8カ所での面接の結果8名を選出。8月5日～8日には広島長崎での合宿も実施して、今通信トレーニングを始めています。

今回選ばれた8名は一～四期生にまけない位皆熱心でファイトあふれる人たちで、通信トレーニングもしっかりしたものにしようとはりきっています。

レイスロップご夫妻（NACアメリカ代表）の四国と北海道に行きたいという強い希望を組み入れて、今回の面接の旅はとても充実したものになりました。四国と北海道では現地の被団協の会長さんが受入れを引きうけてくれました。また、東京から名古屋にいく途中経由した長野では、長野被団協（ピカドンというレストランを経営している前座良明さんが会長）にも立ち寄ってもらうことができました。ただ、残念なことにメリー夫人が体調を崩され、いま治療をはじめておられます。ご本人はNACは何年でも続けると言っておられます。ぜひ可能な方法で激励して下さい。山口由美子さんの本も増刷されました。94年1月14・15・16日、第五期生の2回目合宿を大阪で行う予定です。近くの方はアドバイスをお願いします。

私自身は日々超多忙ですが、太郎（三才八カ月）次郎（八カ月）とともに元気です。子育てもまたすばらしい平和活動と思います。

（NAC事務局）

インド平和交流の旅へ

鳥取県　前田　藤子

このたび「インド平和交流の旅実行委員会」（代表委員、黒川万千代）に参加して、鳥取県原水協代表として伊谷周一氏とともに11日間のインドへの旅に出かけることになりました。

今、世界では「冷戦は終った。平和運動や原水爆禁止運動は無用

となった」などという論が流されたり、国内では「保守も革新もなくなった」といわれています。ちょうど53年前、国を挙げて戦争遂行のために「翼賛政治」が行われた時代とそっくりな危険な状況にありますが、核兵器をめぐる情勢はどうでしょうか。

今夏の原水爆禁止世界大会の国際会議「広島宣言」は①旧ソ連中心の軍事ブロック崩壊後もアメリカの大量核兵器維持と軍事ブロック体制は不変、②ロシアの核兵器による力の政治も続行、③クリントン政権の「第三世界」への干渉政策強化、これらの国を標的とする核兵器使用計画の保持、④日本政府のアメリカ核政策への協力、米軍基地強化、「非核三原則」の法制化と「被爆者援護法」制定の拒否、を指摘しています。

インドでは宗教者、科学者、大学生を含む多くの平和活動家たちと交流するとともに、平和集会に参加して、インド民衆がインド政府に対して「核兵器廃絶国際条約を締結せよ」との大運動を起こすキッカケ作りに協力したいと思っています。

核実験による核被害者の実相が今、世界中でしだいに明らかになっています。そして日本の被爆者は一日平均三十人ほど亡くなっております。この「インド平和交流の旅」へのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。（平和交流団は11月27日出発。ケララ州、デリー等で平和集会に参加、現地の人びととの交流をすすめ、12月8日帰国予定。）

（鳥取県八頭郡　　）

短歌で平和を訴える

長崎市　山道　正登

先日『証言』誌お送りいただきありがとうございました。国際的な大きな輪となっているご活躍に新たに感銘を覚えました。

私ども歌の実短歌会は短歌というジャンルで核廃絶と平和を訴え年一回特集号を組んでいますが、それが少しでもお役に立てたと思うと苦労の甲斐があったと嬉しく思います。ご活躍をお祈りします。

遠い国に敵でなく友がいる

―元オランダ人捕虜と語る―

濱崎　均

戦時中、日本軍の捕虜として長崎の香焼島の収容所や、インドネシアで婦女子収容所に収容されていたオランダ人一行が、十一月四日、長崎を訪れた。

午後三時ごろ、田島治太夫さんや私らが待つ爆心地公園の外国人戦争犠牲者追悼碑の前に集まった。

一行は碑の前で心にしみる鎮魂の合唱をし、田島さんとひとしきり交流をしていた。田島さんも感概深げであった。

そのあと、四時ごろから平和会館のレストハウスで、ビデオ「長崎の原爆」を見、四人の被爆者と交流をした。その四人は、今田斐男さん、吉山秀子さん、下平作江さんと私である。

被爆体験を一人二分で話してくれと事務局から要望され、それぞれが、ほんとに骨子のみ話した。

そのあとの意見交換で、インドネシアで収容所にいた一人の女性が次のように語った。

「私たちはどうして生き残ったか、長崎の原爆がなかったら私たちは死んでいる。自分たち以外の人の苦しみのおかげで生きている。私たちも苦しんだ。が、その苦しみを乗り越えたい。私たちも皆さんと同じようにオランダで子供たちに戦争のことを伝えている。それが私たちの役目だ。遠い国に敵ではなく、友がいる。ありがとう」

今度来た人の中には、なぜ敵国の日本に行くのかと日本行きを止められた人もいたのである。

さらにもう一人は、長崎で被爆して山に逃げる時、日本兵が貸してくれた外套を持ってきていた。今、ハーグの博物館に展示してあるのを借りて来たのだが持ち主がわからないかということである。残念ながら所有者の氏名は消えていた。今田さんが着てみた。陸軍下士官用の外套のようで、生地のよさに驚いた。

このほか、捕虜に親切にした日本人、日本人に親切にした捕虜の話も出、意義深い交流会だった。